広報はいづか 109 号（平成 26 年６月）

カラスザンショウ

アゲハの幼虫がミカン科の樹木の葉を食べて育つことは、皆さんよくご存じでしょう。では、写真の葉っぱ、何だか分かりますか。

答えは題名のカラスザンショウ。別にめずらしい木ではありません。山の急斜面を歩くときに、思わずつかんでひどい目に合う、幹や枝がするどい棘におおわれた、あれですよ。でも、葉にはあまり馴染みがないのではないでしょうか。成長がはやく幹がひょろひょろとのび上がり、頂部にしか葉をつけないので、間近に見る機会は少ないでしょう。写真の葉は発芽後２年目程度の幼木で、めずらしく見下ろす形になり、幼虫が居ることに気づきました。

ところで、カラスザンショウに養われているのは、アゲハ類ばかりではありません。晩秋になると、いろんな鳥が実を食べにやって来ます。「野鳥と木の実ハンドブック」によれば、鳥が好む木の実のベスト５に数えられることは間違いないそうです。

でも、普通のサンショウの実と同じように、美味しそうな果肉などまったくありません。完熟すると薄い果皮が割れ、黒くて丸い種子が露出します。鳥はその種子だけを食べているのです。種子は固くて、ほぼそのままの姿で排泄されます。いったいどうして、鳥はそんな種子を食べているのでしょうか。

答えは種子の黒光りにありそうです。同じように、黒光りしていて鳥が好んで食べる種子を、以前たくさん集めたことがあります。アカメガシワです。触っていると、手が油まみれになりました。鳥たちは、種子表面の油だけを摂取するために、黒光りの種子をせっせと丸呑みしているものと思われます。